



書評

価格はすべて10%税込です

“心もとなさ”からはじまる心理臨床

滝川一廣監修

中島由宇，櫻井未央編著

金剛出版，A5判208頁，3,520円，2025年9月刊

(ミネルパ病院) 田中康雄

長く臨床をしていても、いまだに「うまく僕の思いが伝えられていない」という思いを抱くことは少なくない。ましてや「キミの思いをほくはどれほど理解できているだろうか」と感じることも。

本書は、2021年から4回にわたり開催された学会の自主シンポジウムを土台にして、こころの専門職である心理職（p184）が抱く，“心もとなさ”をめぐって、思い、考え、尋ね求めたことを纏めたものです。心理職を目指す方だけでなく、対人援助に関わる、関わろうとしている方は、できればグループで本書を読み議論してほしいと思います。

本書は、編者等には申し訳ありませんが「地味な本」です。でもその内容は、挑戦的であり、大きな勇気を与えてくれます。誰に付度することもなく「王様は裸だ」と正論を唱えた少年のように。

本書は9名の執筆者が、さまざまな臨床場面でクライアント（あるいは施設で生活している児童）と出会うなかで生まれる，“心もとなさ”（編者は、これをもやもやと不安で、なんだか落ち着かず、もどかしいような頼りないような所在ない感じ、と定義しました）を個々に考えたものです。

「はじまり」で、倉光は、この“心もとなさ”は、概念的理解（外側から分かろうとする姿勢）と、共感的理解（推測を伴い、相手の心の世界に生起した感情やイメージを内側から分かちあおうとする態度）が行われるなかに生まれる、と述べています。二つの理解は、生来的な個性と、育ちと学びの経験が複雑に絡み合い個々に成されるはずで。執筆者が抱く“心もとなさ”は、決して一つではなく、それぞれ固有なものとして記されていきます。ですから、各執筆者は、少なくとも心理職としての出立（時に

極めて私的なエピソードも含め）に対して相応の自己開示を行います。“心もとなさ”には、孤立感、孤独感、罪責感と、自己評価の揺らぎが生まれます。だからこそ、それを分かち合いで埋める必要があります。各執筆者の論文が独立しつつも、それぞれに敬意が払われ、尊重しあう思いから、やさしく縦横に織られながら、支援者、専門家も「弱い」存在であり、そして「弱い」存在でよいのだ、という力強いエールを感じることができます。

かつてベッテルハイムは、「心理学は他者について知ろうとする。しかも、私の考えからいうと、それにはまず自己を知ることが必要であるにもかかわらず、その意気込みのないままに、あまりにも他者を知ろうとしすぎるきらいがある」と述べています。

精神科医の土居健郎は、精神科面接で、「わからないという場合は、それが前以て馴染んだものと異質であると認識するから」とし、「かんたんにわかってしまっはいけない」としつつ、『『わからない』感覚を保持することは決して楽なことではない』とも述べています。僕は、日々の臨床のなかで、わからない感覚を持ち続け関わり続けるなかで、認識していた異質さが薄まっていくように感じる時があります。きっと僕の“心もとなさ”がほんの少し弱まったときなのでしょう。

僕は本書を読み、それぞれの筆者の愚直ともいえる率直さと逃げない覚悟、それを支える仲間、そしてなによりも相手への敬意を強く感じることができました。思うに、“心もとなさ”は関係性のなかで変容していくのでしょうか。

支援者だけでなく、支援者に向き合う方も含め、多くの方に読んでほしいと思います。

文 献

- Bettelheim B (1967) The Empty Fortress : Infantile autism and the birth of the self. Free Press. (黒丸正四郎・岡田幸夫・花田雅憲、他訳 (1973) 自閉症 うつろな砦1, みすず書房)
土居健郎 (1992) 新訂 方法としての面接—臨床家のために、医学書院。